

# 分類法キイノート

増補第2版

宮沢厚雄

樹村房

1	はじめに	03
	分類記号の位置付け	
2	主題分析(1)	10
	分類記号付与の基本手順/演習問題	
3	主題分析(2)	15
	本表(細目表)と階層構造/演習問題	
4	主題分析(3)	24
	主題の特定と関連索引/演習問題	
5	補助表(1)	32
	形式区分/演習問題	
6	補助表(2)	40
	地理区分・海洋区分/演習問題	
7	補助表(3)	46
	言語区分・言語共通区分/演習問題	
8	補助表(4)	53
	文学共通区分・地域的論述の細区分・その他の固有補助表/演習問題	
9	補助表に関する総合演習問題	64
	演習問題	
10	分類規程(1)	67
	複数主題(対等と相互作用)/演習問題	
11	分類規程(2)	73
	複数主題(重点処置)と原著作・関連著作/演習問題	
12	分類規程(3)	84
	伝記/演習問題	
13	分類規程に関する総合演習問題	92
	演習問題	
14	分類法に関する総合演習問題	95
	演習問題	
15	請求記号	99
	所蔵事項としての分類記号/演習問題	

\*この増補第2版は、解説を充実させ、演習問題を拡充させました。また『日本十進分類法』新訂10版の、第1刷から第3刷まででなされた誤植訂正にともない、関係する箇所に必要な補筆を施してあります。

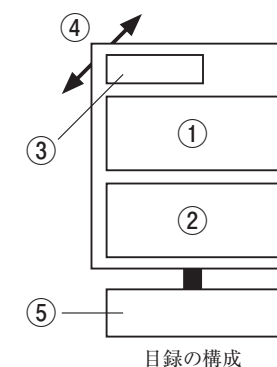
# 1 はじめに

## 分類記号の位置付け

### 1.1. 分類記号の位置付け

図書館目録は、次の五つのパートから構成されています。

- ①書誌事項の記述
- ②主題に関する事項の付与
- ③見出し項目の選出
- ④見出し項目の編成
- ⑤所蔵事項の付与



以下、それぞれの概略を述べます。

**【1】** 書誌事項は、資料に表示されているデータのことです。タイトルや著者名、出版社名や出版年など数多くのものがあります。これらの書誌事項を資料の表示のなかから選出し、決められた順序にしたがって、区切り記号を付与しながら、図書館目録として転記していく作業が、「書誌事項の記述」です。略して、「書誌記述」とも呼びます。その方法論が「記述目録法」です。

**【2】** 主題 (subject) とは、資料のもつ中心的なテーマのことです。資料が「何々について」しるされていると集約できるのならば、その「何々」の部分に相当します。いわば、著者がもっとも訴えたい案件です。「主題に関する事項の付与」は、この主題を表現しているデータを付与する作業であり、その方法論が「主題目録法」です。

主題目録法の手順は、次のとおりです。資料に対峙して主題を明らかにし (主題分析)、分析結果をまずキーワードに表現したうえで、そのキーワードを統制語彙表と呼ぶ辞書相当のツールを使って主題に関する事項に置き換えるのです。図書館目録では、主題を言葉で表現したものが件名であり、記号で表現すれば**分類記号**です。前者の方法論が (統制語彙表として) 件名標目表を使った「件名法」、後者は (統制語彙表として) 分類表を使う「分類法」です。主題目録法は、件名法と分類法から成ります。

主題目録法の意義は、資料探索のさいに、書誌事項だけを手掛かりにすると検索漏れを起こしてしまう資料を、検索ノイズは拾わずに探し出すことができる点にあります。

## 1.2. 分類の原理

分類 (taxonomy) とは、対象がもつ特徴的な性質 (特性) をもとに、体系化することです。その方法論は、大別して、「分ける」原理と「まとめる」原理があります。

### 【1】「分ける」原理

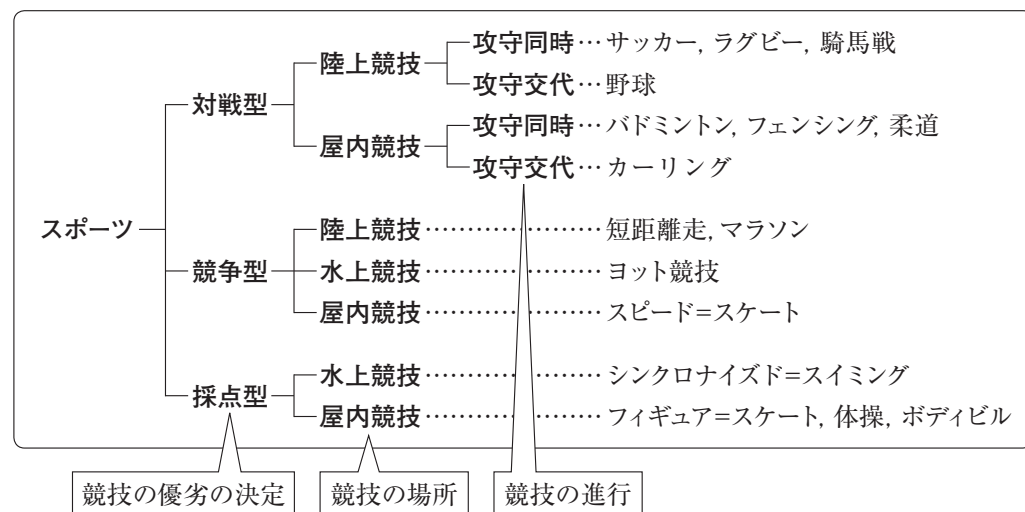
「分ける」原理とは、対象がもつ、他とは異なる特性を取り上げながら、多種多様な対象を選り分けていくことです。差異に矚目し、できるだけ細かく分けを施していき、対象全体を体系化します。日本十進分類法は、この「分ける」原理に基づきます。

【1 a】「分ける」原理にしたがった、もっともシンプルな分類法が、ある特性の有無で対象を二つに区別するだけの二分法 (dichotomy) です。一つの特性 A に着目し、この特性 A があるのか無いのか、つまり「A」か「非 A」かによって対象を両様に選り分けます。

目の前の植物は、食べられるのか食べられないのか。向かってくる相手は、敵か敵でないのか。狩猟採集の時代から、人類は森羅万象を理解する手立てとして二分法を用いてきました。生死を分かちようとする素早い判断を、最小限の情報から下さねばならないときに必要不可欠だったのです。「分ける」ことは「分かる」ことにつながっており、二分法という分類の始まりは、複雑な世界を掌握し、生き延びていくための第一歩でした。

【1 b】二分法から出発して、対象を二つ以上に分け、分けたものをさらに別な特性にしたがって細分化していけば、体系化された分類表 (classified table) が形づくられます。

下記の図は、スポーツを対象とした分類表の一例です。



【1 c】分類表には、被区分体・区分原理・区分肢という、三つの要素があります。

**被区分体**は、分類される対象です。前ページの例では、「サッカー」「野球」「バドミントン」「カーリング」などが被区分体です。

**区分原理**は、分類するうえでの目の付けどころであり、対象の特性を把握するときの理論的根拠です。区分原理は、抽象的なものから具体性を帯びたものへと、順を追って飛躍せずに設定されます。前ページの例では、「競技の優劣の決定」「競技の場所」「競技の進行」が相当しますが、区分原理は分類表を構築する当事者のアタマのなかに存在するものであって、分類表のオモテには出てきません。

**区分肢**は、特性を表現している分類項目です。前ページの例では、「対戦型」「競争型」「採点型」などが相当します。このとき、区分肢はまず、相互に排他的でなければなりません。一つの被区分体が二つ以上の区分肢に属してしまうような事態は回避します。要は、ダブリがあってはならないのです。もう一つは、区分肢の総和が、被区分体の全体を網羅していなければならないことです。いずれの区分肢にも属さない被区分体が生まれてしまうのを避けなくてはなりません。モレがあってはならないのです。そのために、しばしば「その他」「雑物」といった区分肢が立てられます。

区分原理を洗い出して適用する優先順位を決め、区分原理から導かれる複数の区分肢を順に設定し、被区分体をその区分肢に当てはめることで、分類表は構築されます。

[注記] 18世紀、スウェーデンの博物学者・リンネ (1707-1778) は、生物分類法に大きく貢献しました。その功績は、三つ挙げることができます。

第一は、まったく新しい区分原理を提案したことです。それは、雄しべ・雌しべの数と配置、つまり植物のもつ生殖器官の構造でした。ドイツの植物画家・エーレット (1708-1770) がリンネに認められ、この区分原理を独自に描画しています。

第二は、厳密で整然とした階層構造を与えたことです。最上位に界 (Kingdom) を置き、以下、門 (Phylum/Division)・綱 (Class)・目 (Order)・科 (Family)・属 (Genus)・種 (Species) というように体系づけました。

第三は、学名 (scientific term) を確立させたことです。生物の名前を、属と種の二語の組み合わせで示すこと、ラテン語表記とすること、一つの種には一つの名称が正式に対応することという、学術的な名称の標準化を行なったのです。

例：ヒト	
界	動物界
門	脊椎動物門
綱	哺乳綱
目	サル目
科	ヒト科
属	<i>Homo</i>
種	<i>sapiens</i>
-----	
例：ローズマリー	
界	植物界
門	被子植物門
綱	双子葉植物綱
目	シソ目
科	シソ科
属	<i>Rosemarinus</i>
種	<i>officinalis</i>

## 2

### 演習問題 主題分析(1) 分類記号付与の基本手順

#### 問い1 分類記号を与えよ。

- ①『あくびの科学』メヂカルフレンド社 編集部編  
眠いときや退屈なときなどに不随的に起こる呼吸運動を科学する。
- ②『脱脂大豆の栄養価』厚生労働省 医薬食品局 食品安全部 基準審査課編  
脱脂大豆は、大豆から油脂分を抜き取った残りをいう。タンパク質に富み、飼料のほか、味噌や醤油の原料、プロテイン=パウダーや育児粉乳など加工食品にも用いる。
- ③『万葉秀歌評釈』山本健吉著  
万葉集のなかから約四百の秀歌を選び、ゆきとどいた注釈を付す鑑賞の手引き。
- ④『カリグラフィー 本格入門独習ブック』日本ヴォーグ社 編集部編  
カリグラフィーは、文字を美しく見せる技法。装飾的なデザインが専用のペン先からスラスラと。基本3書体(イタリック体・ゴシック体・カッパープレート体)の独習書。
- ⑤『4Hクラブ』農事研究会 長野県支部編  
4H(よんエイチ)クラブは、20世紀初頭に米国で発祥した、よりよい農村をつくるための農民啓蒙組織。名称は、Hands・Head・Heart・Healthという4つの言葉の頭文字。

#### 問い2 正しい記述をすべて選び、冒頭の数字を○印で囲め。

- 1 件名はその資料をしるした著者が付与し、分類記号のほうはその資料を受け入れた図書館員が付与する。
- 2 件名は目録作成のさいにまったく付与しなくてもかまわないが、分類記号は所蔵事項として必ず一つを付与しなければならない。
- 3 件名は目録での見出し項目として立てられるが、分類記号のほうは目録での見出し項目とはなりえない。
- 4 件名の文字数は件名標目表で一定の制限が加えられているが、分類記号の桁数には分類表での特段の制限はない。
- 5 件名は調べたいことをピンポイントで探索できるが、分類記号は大きな概念から始めてカテゴリを順に絞り込みながら探索できる。

## 3

### 主題分析(2)

#### 本表(細目表)と階層構造

#### 3.1. 階層構造の展開

本表(細目表)の階層構造は、下記のように構築されています。ここでは、「文学」のなかの「日本文学」、その「日本文学」のなかの「詩歌」というように、上位の概念から下位の概念へと、入れ子状の階層構造が展開しています。分類項目の範囲がだんだんと絞り込まれ、それにとまって分類記号の桁数のほうは一つずつ増えていくのです。第一次区分(類)はアラビア数字1桁で10区分、第二次区分(綱)は2桁で、類のそれぞれをさらに10区分して作られ、全体は100区分(10区分×10)、第三次区分(目)は3桁で、全体が1000区分(100区分×10)、第四次区分以下はまとめて細目と呼び、桁数は4桁以上です。

9	文学
9 1	日本文学
9 1 1	詩歌
9 1 1 1	和歌
9 1 1 1 2	万葉集
9 1 1 1 2 4	万葉集の評釈

このような階層構造の展開が、実際の本表(細目表)では次のように表現されています。

9 0 0	文学
9 1 0	日本文学
9 1 1	詩歌
. 1	和歌、短歌
. 1 2	万葉集
. 1 2 4	評釈、注釈、語釈

ここで注意すべきは、第一に、分類記号の3桁と4桁のあいだに「点」が打たれていることです。この「点」は、視認性を高めるための便宜的なものに過ぎません。これを「小数点」とか「ピリオド」などと呼んでしまうと、特定の意味を呼び寄せて誤解を招きます。